「日々の理科」（第 787 号） 2016（H28),-9,-1

「ガンタケ」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

台風の大雨のあと、気温が上がったからだろう、あちこちにキノコが発生している。キノコ（子実体）というのは、胞子を作って飛散させる為のもので、顕花植物（種子植物）であいえば、果実に相当する部分である。実は、菌糸の大部分は地面の下にあり、キノコとして見えている部分は、菌体全体のごく一部分だけなのである。

菌糸からキノコ（子実体）が発生するタイミングは、雨のあとや、気温の急変がきっかけになることが多い。台風のあとは、地面が湿って、気温も急に上がるので、キノコの発生条件としては最適なのだ。今朝も、附属幼稚園の脇にある、植え込みの樹木の根元に、薄茶色のキノコが何本か生えていた。

薄茶色の傘に白いイボイボが見える。「パッと見」テングタケである。「テングタケ」は有名な毒キノコで、キノコに詳しくなくても、知っている方が多い。しかし、テングタケ属 *Amanita*（アマニタ）のキノコは似たものが多いので、同定には注意が必要だ。

このキノコも、近寄ってよく観察したら、テングタケではなくガンタケであった。「ガンタケ（雁茸）」も、テングタケ属のキノコで、主峰テングタケとよく似ている。傘の色がやや薄く、雁の色に似ているので、この名がある。かつては食用菌に分類されていたが、現在は毒キノコとして扱われている。これからの季節、足元のキノコに注意して歩いてみたい。

「ガンタケ」　*Amanita rubescens*
テングタケ科テングタケ属　お茶の水女子大学構内